

第2章
調査結果レポート

1. ^{うすき}くらたび^{うすき}白杵 (大分県白杵市)

コロナ収束後の誘客へ向けて「オンライン農泊」をスタート。
海外からの誘客も含め、白杵の魅力化を推進中。



【白杵市のプロフィール】

▶ 白杵市は、大分県の東海岸、県庁所在地（大分市）に隣接する人口35,127人（2021年12月白杵市推計）の市です。主要産業は農業・水産業や醸造業など。

▶ 白杵石仏（白杵磨崖仏）は平成7年（1995年）に磨崖仏としては日本初、彫刻としては九州初の国宝に指定されており、多くの観光客を集めています。

▶ また白杵市中心街にある白杵城跡や城下町も歴史をしのぶ観光地となっています。白杵城の築城は1562年で築城主はキリシタン大名として有名な大友宗麟です。城下町にはキリシタン大名の歴史が伺われるたずまいが残されています。

▶ 安心院町が「グリーンツーリズム」「農泊」の地として全国的な知名度を高めることで、大分県の各地においてもまたグリーンツーリズム&農泊が盛んとなりました。白杵市も例外ではなく、農泊をひとつの核として地域づくりの活動が行われています。



(1) 「くらたび臼杵」と事務局長・藤沼美和さん

令和3(2021)年12月8日(水)、熊本市から阿蘇を越えて、竹田ICから中九州横断道路を経て臼杵市へ。

この日は鹿児島で農泊に取り組んでいる「ムラたび鹿児島」の皆さんが視察に来られるということで同席させていただきました。視察に合わせて一緒に行動すると、意見交換もできるでしょうと、「くらたび臼杵」の事務局長・藤沼美和さんがセッティングしてくれたのです。

「くらたび臼杵(会長:平林真一さん)」は、臼杵市も構成員として参加している協議会形式の団体として令和元年(2019年)9月に設立されました。「ずっと暮らしたい町へ」をビジョンに掲げ、インバウンド推進や観光客を対象とした体験プログラムの作成などを行っています。「農泊」ばかりではなく、オンラインツアーの開催や広域連携による長期滞在型プランの開発などにも取り組んでおり、長期的な臼杵の関係人口増加や持続可能な地域社会の実現を目的としています。

事務局長の藤沼さんはアメリカ生まれ。子どもの頃はオーストラリア、日本、アメリカで暮らし、大学院卒業後、日本に帰国。関東で暮らしていましたが、東日本大震災をきっかけに九州へ移住。現在は臼杵市で翻訳・通訳・外国人向けツアーガイドなどを本業としながら、「くらたび臼杵」の事務局長を務めています。

ツアーガイドで各地を旅するうちに臼杵市の魅力を再確認。海外に向けて臼杵の情報を発信したいと考えるようになりました。「くらたび臼杵」の設立直後には観光客誘致のためにフランスを訪問。旅行代理店などで手応えを得ましたが、新型コロナウイルス感染症によって成果には結びつきませんでした。現在、コロナ後に活用できるプログラムの開発に向け精力的に取り組んでいます。

今回注目したのは、オンラインツアーの取り組みです。遠隔地の方に臼杵の農泊を疑似体験してもらいたいと企画された「オンライン農泊」や線香づくりを体験する「オンラインお線香づくり」、学校と結んだ「オンライン修学旅行」などのさまざまな体験プログラムのほか、イギリスのケンブリッジ大学の日本学科の学生たちとの「オンライン留学」まで実施されています。コロナ禍ゆえの「オンライン」という技術がどのように活用されているのか、また、それが海外との関係というところまでどのように発展していったのか、ぜひお伺いしたいと考えたのです。



くらたび臼杵 平林会長(左)と藤沼事務局長(右)



事務局長・藤沼さんと臼杵石仏近くのカフェにて

(2) 鹿児島からの視察団とともに臼杵を歩く

「ムラたび鹿児島」の皆さんは臼杵石仏に到着し、藤沼さんのガイドで臼杵石仏ならびに臼杵市の城下町を見学後、農泊家庭へチェックインするという行程で視察。私たちは「ムラたび鹿児島」の皆さんの視察に同行させていただく形で、取材を進めます。

「ムラたび鹿児島」は8軒の農家民宿と4軒の飲食店で構成された団体で、農泊地域として採択されたのは令和2年(2020年)です。「教育旅行からインバウンド事業などビジネスとして実施する農泊への転換を図る」および「田舎を題材にした五感を刺激するツアーを構築するため、ガイドブックに紹介されていない『知られざる鹿児島』を紹介し、未だ観光開発されていない地域に足を伸ばして『ユニークな体験』『地元住民との触れ合い』など、精神的な満足感を重視した農泊を目指す」を目的として掲げています。

今回の視察は、代表である吉村清美さんと妻・英子さん(農家民宿きよちゃん)、ほかに3軒の農家民宿のご主人方3名、アドバイザーも務める旅行会社の方3名、合計8名が参加していました。鹿児島市から臼杵市までマイクロバスで5時間の旅だそうです。

臼杵石仏(臼杵磨崖仏)周囲は公園化されており、年間を通して多くの観光客が訪れています。

臼杵市中心部へ移動し、街なかにそびえ立つ臼杵城跡を見学しました。臼杵城は西南戦争の舞台ともなった大分県の史跡です。

臼杵市の観光ポイントを見学した後、17時に野津中央公民館に移動し、農泊家庭の皆さんと合流。宿所ごとのグループに分かれ、各家庭のご主人に先導していただき、各家庭へ。インターにも近く、それほど山深いわけではありませんが、道が入り組んでおり、すでに日は落ちていますから迎えに来てもらって助かりました。



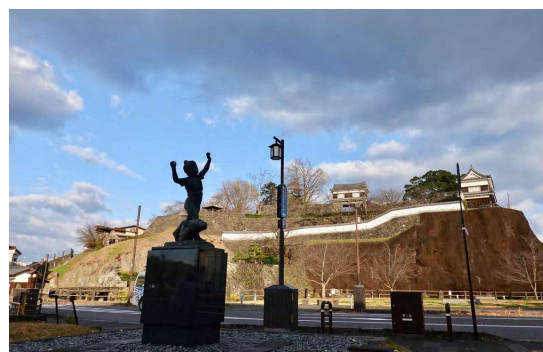
ムラたび鹿児島の方々と藤沼さんの案内で石仏見学



ムラたび鹿児島の吉村代表



国宝・臼杵石仏



臼杵城跡

(3) 農泊家庭「優しい時間」とキーマン・足立完治さん

私たちが泊めていただく農泊家庭は「優しい時間」という名前で、ホストは足立完治さんと妻・佳代子さんです。なお、「優しい時間」の住所は正確には臼杵市内ではなく、隣接する豊後大野市犬飼町に位置しています。

「優しい時間」こと足立家は築70年の日本家屋です。周辺には田畑が広がり、裏手には山。いかにも日本の原風景といった環境に心が和みます。

到着し、母屋の玄関に入って驚いたのは、所狭しと並べられた民芸品などです。佳代子さんに「あっちはもっとすごいですよ」と言われて、囲炉裏のある別棟を覗いてみると確かにすごい。民芸品、バイクのミニチュア、SF映画のフィギュア、陶器、アンティークの家具や電話機、着物、絵画・・・全て足立さんのコレクションで、多趣味ぶり、好奇心、そしてお客さんをもてなすサービス精神があふれています。そもそもこの囲炉裏も、昔は2階建ての高さがあった牛舎を足立さんが一度解体して平屋造りの囲炉裏に改築したというのですから、半端ではありません。

翌日、「くらたび臼杵」メンバーと「ムラたび鹿児島」メンバーとの意見交換会が行われる足立家の裏手の広場も、裏山と畑を使って足立さんが広げたスペースで、キャンプ用具やブランコなどが設置されています。この足立完治さんの好奇心と行動力が「くらたび臼杵」の大きな機動力になっているようです。

夕食は囲炉裏を囲み、足立さんご夫妻と一緒にいただきました。メインは猪肉の煮込みハンバーグ。粗挽きでしっかりと焼かれて香ばしく、猪肉の旨味が満喫できる絶品料理でした。ソースや具材の野菜は自家製です。

足立さんは農家に生まれ、役場で教育関係の役職などを経験した後、農業をやりながら農泊に参加しています。以前は別団体に所属していましたが、令和元年(2019年)9月に「くらたび臼杵」が設立されたのを機に合流しました。農業の方はサツマイモを中心に栽培・出荷して好調だそうです。農泊は新型コロナウイルス感染症の拡大で令和元年(2019年)12月から宿泊者はゼロとなり、取材で訪れた私たちが久々の宿泊受け入れとなったそうです。

宿泊客は子どもから大人、海外のお客さんまで幅広いそうです。

「修学旅行生も多いです。臼杵市の小学5年生が毎年来て



農泊家庭「優しい時間」



「優しい時間」の玄関



牛舎を改造した囲炉裏のある離れ



囲炉裏を囲んで食事 足立完治さんと妻・佳代子さん

くれて、岡山の中学生、大阪の高校生なども来てくれた。

私は畑にひまわりを植えているんですが、ちょうど植える時期に大阪の高校生が来ましてね。そのうちの女子生徒5人をうちに泊めて、翌日畑に連れて行き、『さあ、植えるよ』と言ったら、もじもじしてたけど『靴と靴下脱いで、畑に入っていいですか』と。17、18歳の女の子が畑を20～30分走り回ってね。『18年間、裸足で地面を歩いたこともないし、さわったこともなかった』と言うんですよ。その子たちが帰って行く時、『お父さん、ハグしていい？』と。ハグしながら泣いて。私も感動しちゃって涙が出ました。

学校教育で学ぶことは人生のほんの数パーセント。残りは家庭と社会で学ぶ。子どもたちにとっては学校以外で会う人たちも先生。そんな先生たちから知恵をいただくことが大切なことではないかと思っています」と、足立さんが話してくれました。

臼杵の農泊家庭には海外からのお客さんも多いそうです。もともと足立さんは香港の学生のホームステイ受け入れを20年以上行っています。

「最初、ホームステイの受け入れを決めて家族に報告したら、親父が大反対しまして。なんとか説き伏せてまず一人目を受け入れた。いい子で、今も交流があります。で、彼が帰って行ったら、親父が『次はいつ来るとか？』と(笑)」。

農泊を始めてからも印象深い海外からのお客さんが何人もいます。

「ツアーガイドから、イスラエルのお医者さん夫妻が日本に40日間滞在する予定だけど、ホテル以外の変ったところにも泊まってみたいと要望している、と連絡があり受け入れた。帰国後に旅費を出すからイスラエルに遊びに来ないかと手紙が来ましたよ。感動しましたね。心底喜んでくれたというのが嬉しくて」。

結局、イスラエルには行かなかったそうですが、香港にはホームステイした学生の結婚式出席のために訪問したそうです。農泊の現場では国境を越えた交流が生まれているのですね。

「人との出会い、お金に変えられない心の財産になるので、農泊はやめられない。こんな田舎で国際交流してるんですから。お客さんたちよりも私たち夫婦が楽しんでいきます」と足立さんは楽しそうに語ります。



豚肉の煮込みハンバーグ



足立完治さん

(4) 「くらたび臼杵」「ムラたび鹿児島」、意見交換会を取材する

今回の訪問のもっとも大きな収穫は、この意見交換会でした。特に「オンライン活用」と「海外観光客の受け入れ」という私たちもお聞きしたい2つのテーマについて具体的な意見交換が行われました。熊本の農泊地域の皆さんにも参考にさせていただけると幸いです。

1) 「くらたび臼杵」の概要と活動(藤沼事務局長より)

「くらたび臼杵」は臼杵の良さをもっと発掘して、なりわいを作り、ずっと臼杵で暮らしていくことができればいいなという意味で立ち上げた団体です。

農泊を通じて臼杵の暮らしを体験してもらうために体験プログラムを作ったり、コロナ禍の中ではオンライン農泊体験などにも取り組んできました。

また、コロナ禍の前には臼杵をプロモーションしようとフランスにも行ったんですが、臼杵単体での売り込みは難しい。「臼杵ってどこ？大分ってどこ？そもそも九州ってどこ？」という感じだし、「日本ってどこ？」という人たちもいますから。

そこで現在、四国の松山空港から入って、愛媛の内子町に泊まって、フェリーで臼杵まで来て、高千穂や阿蘇に行ってもらおうというルートを提案しています。明日も内子町の観光協会長さんが来られて広域連携の話などを予定です。

「くらたび臼杵」ではターゲットを「インバウンド向け、個人旅行者向け」と想定しています。大型の団体旅行だと正直対応ができないところもあって、「田舎の暮らしに価値を置いている人たち」に来ていただきたいと。くらたび臼杵の各農泊家庭には、ご指名いただけるような魅力的な個性がすでにありますから、その個性をさらにより良くしていけたらいいなと思います。

2) オンラインの活用と展開(藤沼事務局長より)

最近「優しい時間」の足立完治さんをメインにオンライン農泊体験もやっています。

オンライン農泊体験というのがどういうものかという、私がネットに接続されたカメラで撮影しながら農泊家庭とオンライン参加者をつなぎ、交流するというものです。実際に足立さんの「優しい時間」で行う時は、まず周辺の山を歩いて、足立さんの「優しい時間」へと移動します。

カメラは「優しい時間」の中に入っていきます。足立さんの趣味のギャラリーを紹介したり、母屋の構造を案内



意見交換会の模様

くらたび臼杵のオンライン農泊の様子



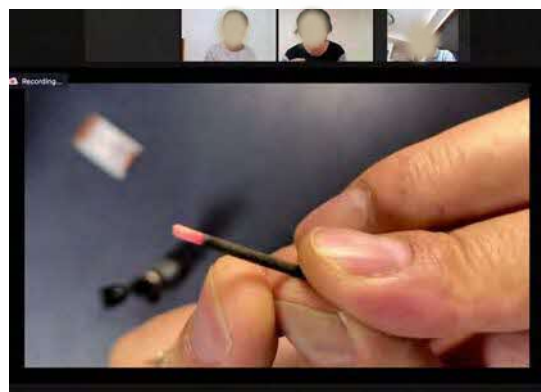
して、「あなたが宿泊する時はここが寝る場所。ここに布団があります。ここは仏壇。トイレはこっち、台所はこっち。ごはんを食べるのはこの部屋」と紹介していきます。

パソコンを通して見ている参加者は各地バラバラですが、お互いに顔も見れるし、写真を見せ合ったり、会話したりします。すると、本当に農泊に来て交流しているような感じで、「足立さんのところに行きたい」となるんです。

オンライン活用プログラムは、農泊以外にも、「オンライン金継ぎ」とか、臼杵市は醸造文化が発達しているので「オンライン醸造ツアー」とか、「くらたび臼杵」の会長(平林真一さん)が仏具屋さんなので「オンラインお線香づくり」があります。オンラインお線香づくりは事前にお線香づくりキットを送り、オンライン当日に「これから1番のお香を焚いてください」と言うと、みんな違う場所ですが、同じ匂いを体験することができます。ただ配信するのではなく、離れていてもつながりを感じられるように、相互間を大事にしています。

こういった活動を続けていたら、こちらから営業をかけたわけではないのですが、大分市の小学校から「オンライン修学旅行を作って欲しい」と言われたり、イギリスのケンブリッジ大学から「日本学科の学生は、日本で1カ月間働かないと単位がもらえない。でもコロナで日本に行けないからオンラインインターンシップをやってもらえないか」と相談があり、実際にオンラインで受け入れました。

また、シンガポール・アメリカンスクールのジャパクラブという同好会から「日本の農泊について教えて欲しい」という依頼があり、学生さん20人くらいと英語でオンライン交流しました。



オンラインお線香づくりのワンシーン



3) オンライン農泊をやってみた感想(「優しい時間」足立完治さんより)

オンライン農泊は令和2年(2020年)7月から毎月やっています。最初、藤沼さんから相談があった時には、経験もないし、「ちょっとできんわ」という気持ちだったんですが、やってみると面白いんですよ。画面の向こうにいるんだけど、目の前にお客さんがいるみたいに感じるし。

いろんな人と交流できて、こっちのことも理解してもらえて、向こうの良さもわかる。先月はシンガポールと交流しました。新しいメディアを使いながらやるのは本当に必要。やってよかったですね。

4)「ムラたび鹿児島」の概要(代表:吉村清美さんより)

昨年度(令和2年度)、立ち上げたグループです。インバウンド事業を発展させたいという目標を持っています。民宿、農家レストラン、直売所など多様な人たちと一緒にやっていくつもりなのですが、なかなか難しいところもあり、研修に参りました。

鹿児島大学が来年度から授業の一環として農泊を取り入れるということになり、その窓口をやることになりました。学生さんたち40名を2回受け入れ、毎年80名が農泊します。これを皮切りに研修を重ねて、海外のお客さんを迎え入れる体制を作っていきたいと思っています。



ムラたび鹿児島 吉村代表

5)インバウンド(海外客)の受け入れについて

インバウンドの受け入れについて質疑が交わされました。ここではそれをダイジェストで紹介します。

藤沼さん(事務局長)「設立時にコロナが直撃したので、『くらたび白杵』はインバウンド受け入れの経験はないのですが、農泊家庭の皆さんはそれまでに豊富な経験を持たれています。質問があれば・・・」。

ムラたび鹿児島「これまで海外のお客さんもあったのですがその方たちは日本語対応でOKでした。外国語対応となると不安です。皆さんはどのように対応されているのですか？」。

足立(完治)さん(白杵)「最初は大変でしたが、今は30数カ国語しゃべってくれる便利な翻訳機があります。田舎にいながら海外の人と交流できて、ヨーロッパ旅行や韓国旅行がちょっとできる気分です」。

神野(徳子)さん(白杵)「国際交流が盛んな立命館アジア太平洋大学と関係があり、アメリカ系、アフリカ系、いろんな国の方たちを受け入れています。言葉は心配でしたが、片言の単語でなんとかできました。身振り手振りで気持ちが通じるのかな。苦労したのは宗教関係。『ごほんよ』と言ったら『いまお祈りの時間です』とか」。

大島さん(白杵)「言葉は身振り手振りで。今度同じ国の人 cameたらこうすればいいやねと、お客さんから学びました。イスラエルの方が『向こうではカエル(フロッグ)を食べる』と言うのを旗(フラッグ)と聞き間違えて。綺麗な奥さんがカエルの鳴き声や跳ぶマネをされてね。それですごく親密になって。だから『わからないことは楽しいこと』だとも思いますね」。

長野さん(白杵)「海外の方は10組受け入れました。ボディランゲージでもスマホの翻訳でもなんとなく通じます。お風呂は『バスルーム』、入っちゃダメなら『ヒア・シークレット』で大丈夫。結構楽しいです。ベルギーの奥様が『習字を習いたい』と言うから、『人』という漢字を手を取って書いて。大事に持ち帰られました。ベルギーに会いに行くと約束したので、コロナが収束したら行きたいですね」。

藤沼さん「私は通訳や翻訳をしているので、まず英語でざーっと説明しますが、『不便なことを楽しみに来たのだから、通訳しないでくれ』と言われたことがあります。『苦労しながら理解していく、その過程が楽しいんだ』という方々が来ているのだと思います」。

ムラたび鹿児島「民宿やって10年ですが、夫婦とも声をかけるのが苦手です。海外のお客さんとの会話が心配です」。

神野(洋一郎)さん「構えて迎えるのではなく、普段どおりでいいと思いますよ」。

神野(徳子)さん「同じ年代だったら孫の話とか。リビングに写真を貼っておくと会話が進みます」。

ムラたび鹿児島「食事や寝具はどうされていますか？家には布団しかないのですが」。

足立(完治)さん「布団で寝たいとか、箸で食べたいとか、海外の方はおっしゃいますよ。日本に来たら日本を楽しむ、ということだと思います」。

藤沼さん「インバウンドのお客さんは1ヶ月くらい日本を旅する。疲れて『ベッドがいい』という人もいるので、ケースバイケースです。その時は事務局に『ベッドにして欲しい』という情報が入ると思います。農泊家庭としては『うちはベッドはありません』とか自分のスタンスを伝えておけばいいですよ」。

ムラたび鹿児島「海外客の経験はありますが、車移動の途中で話しかけられたりして、言葉で困りました。なにか良い方法はありますか？」。

藤沼さん「集合場所で、事前説明されたらどうですか？『うちまでは何分かかります』『コンビニに寄りたいですか』など。あるいは事前説明用のペーパーを1枚作っておくのもいいです。

単語4つか5つくらいで大丈夫だと思いますよ。『マイホーム、30ミニッツ』『トイレOK？ドリンクOK？レッツゴー』『コンビニエンスストア、ユニード？』とか。シミュレーションして、仲間と練習しておくといいかもしれませんね」。

6) ビーガン、ベジタリアン、アレルギーの対応

藤沼さん「対応が大変なのはビーガン。菜食主義の中でも『宗教ではなく、私の主義主張のためです』という方たち。日本人はいったんすべてを受け取ってから取捨選択しますが、欧米では受け取る段階ですでに選択されてないと『なぜだ？』となるケースが多い。また、『私はベジタリアン、ビーガンです。肉は食べません』と言っていた人が『クオリティの高い肉、いい環境で大切に育てられた肉はOKだ』ということもあります。

小麦も厄介です。醤油にも入っているし。小麦に関しては『アレルギーですか？病気ですか？それともあなたの主義ですか？醤油は大丈夫ですか？』と細かく確認します。アレルギーだったら大変ですから」。

ムラたび鹿児島「深刻なアレルギーなら皿やフライパンまで分ける必要がある。農泊家庭では対応できないケースになれば、宿泊される方の家庭でレトルトを作って持参してもらうといった対応になりますね」。

足立(完治)さん「旅行会社から性別・年齢・食のアレルギーなどの情報は来ますよ。アレルギーだと命に関わりますから」。

(5) 「くらたび白杵」の皆さんに「農泊」の楽しさと課題について伺う

鹿児島からの視察団が帰途につかれた後、「くらたび白杵」の皆さんに足立家に残っていただき、農泊を始めたきっかけや楽しさなどについて伺いました。まずは、きっかけから。

1) 農泊を始めたきっかけは？

神野さん「10年くらい前、この地域で修学旅行を受け入れるにあたってキャパが足りないということで頼み込まれて。最初は断ったんだけど、やってみたらハマってしまいました。人とのふれあいが刺激になるし、『私の地元ってこんなにいいところなんだ』と他所の人から教えられます。それが、私が『これをしなくちゃ』と思った一番の理由。修学旅行の子たちが泊まった時、うちの親が昔の林業や炭焼の話をしてくれたんですが、そんな話、私も聞いたことがなかった。農泊で父母の苦勞を初めて知ったんです。土地に対する愛着や受け継ぐ気持ちに気付かされました」。

大島さん「私も『キャパが足りない』と頼まれて。ずっと断ってたんだけど、修学旅行の子どもたちから学ぶことがいっぱいあってね。私たちが当たり前だと思っていることを『わーすごい！』と喜んでくれて」。

足立(佳代子)さん「うちは先に香港の大学生のホストファミリーを始めていたので、それがきっかけです。主人が決めてきて、家族は反対。ところが最初の子たちがすごくいい子で、帰った後で『お母さんのごはんを食べに行きたいです』と電話や手紙が来ました。一番反対していた父も『次はいつ来るんか』と言い始めて、やってよかったなあと。だから農泊を始めることには抵抗感はなかったですね」。

2) 農泊の楽しさとは？

大島さん「あるお客さんを仏間にお泊めしたことがあってね。翌朝、『よく眠れましたか？』と聞いたら『大島さんのご先祖様が見守ってくれたのでよく眠れました』と。そんなこと言ってくれるんやと、泣きたくなるくらい嬉しかったです」。

神野さん「うちは92歳の母が認知防止でマフラーを編んでいるんですけど、お客さんに『これ使ってな』と渡している。外国からのお客さんに着物の着付けをしてくれたり。お客さんが喜んでくれると、母も私もうれしい。家族の持ち味を何も捨てることなく披露できるところがいいですね」。

長野さん「外国からのご夫妻がとっても喜んでくれた。何も無いところなのに、『石垣がきれいだね』『静かがいいところだね、空気が澄んでるね』と」。

足立(完治)さん「自分たちが楽しまないとお客さんも楽しめない。こちらにとっては当たり前の自然がお客さんたちにはご馳走になるとか、気づかせてくれる。肩の力が入っていないおもてなしをしたいですね」。



右から 神野さん、大島さん、足立佳代子さん



右から 足立完治さん、一人おいて、藤沼事務局長、長野さん



右から 足立完治さん、藤沼事務局長

3) 農泊で出会い、つながっていく仲間たち

農泊家庭のお母さんたちの話を聞いていると、仲がいいし、チームワークの良さも伝わります。以前からの付き合いかと思ったら、実は農泊を始めたことによって知り合ったのだといいます。

足立(佳代子)さん「農泊が混んでくるとパニックになりそうに。そんな時には大島さんから『何を言うとの。そげんこと言うとつまらんよ』とハツパがかかります」。

大島さん「誰かが言ってあげないと。世話焼きお婆さんの役目ね。一つずつ片付けていこうや。自分もしっかりせなんし。本当に仲間が一番やからね。同志というかね」。

神野さん「料理を一緒に学ぼうとか、顔を合わせる機会を時々作って。そういうので仲良くなりましたね」。

足立(佳代子)さん「農泊という同じ目的があって、私たちは料理勉強会を開いたり、父ちゃんたちは酒飲んで語り合ったり、コミュニケーションを取っていきました」。

大島さん「みんな年を取るから。足が弱ってくるのは自分たちもわかるし、助け合いが力になるのはすごく感じます。それぞれ刺激を受け合う、集まるって本当に大事」。

藤沼さん「向上心のあるメンバーが集って、仲良くなって、切磋琢磨していかれていますよね」。



神野さんの農泊家庭「へもどつき亭」



大島さんの農泊家庭「若水」



長野さんの農泊家庭「ケ・セラ・セラ」

4) 農泊と料理

農泊では地元の料理も大きな楽しみ。くらたび白杵のメンバーも、試行錯誤を繰り返しているそうです。

神野さん「テレビで得る知識と地元の人たちの腕や経験はまた別物。だから味が違ってくる」。

藤沼さん「ジビエのハンバーグも大島さんが試行錯誤して開発し、その完成形を私たちが習っています」。

大島さん「主人が猟をするので。私は嫌だったけど、どうせ獲るんだったら美味しくしてあげんといかん。試行錯誤して美味しい料理にせんと、ジビエが広がらんと思ったんですよ」。

神野さん「大島さんが美味しい料理を作るまでは、猟師さんが獲ってきて焼いてワイワイ焼酎を飲んで、あの匂いしか知らないから、『猪は食べられない』という人が多かったんですよ」。

大島さん「粗末にしたらもったいない。美味しいのができて、『食べにおいで』と誘って、意見を聞きながら試行錯誤。料理研究家じゃないけど、せっかくですから。ジビエも野菜も粗末にはできません」。

神野さん「だから野菜を作るのも楽しみになってきた。農泊は料理を食べた人の表情とか声とかわかる。それも農泊の楽しみね」。

大島さん「昨夜、『料理、どうでしたか?』と聞くと、『見たらわかるでしょ。お皿が空になってる』と、『臼杵に来てよかった』と言われて。コロナでしばらく泊まる人がいなかったから」。

5) オンライン農泊のやり方

鹿児島視察団との意見交換会でも話題になったオンライン農泊について、重ねてお伺いしました。

藤沼さん「農林水産省の農山漁村振興交付金をいただいてインバウンドを推進する計画でしたが、コロナで一切できなくなって。コンサルの方から『オンラインツアーというのがあるよ』と教えてもらった。しかし、くらたび臼杵のメンバーは『いやいや』と乗ってくれない。徳島のゲストハウスで似たようなことをされていたので、まずそこに足立さんと参加してみたら、『これならできそうな気がする』と言ってもらえて。それで足立さんに頼み込んでモデルになってもらった。

まずホストである足立さんの良さを引き出すために、足立さんの聞き取りをやりました。そして、裏山から見せて、母屋のギャラリー、農泊する部屋を案内し、ごはんを食べながら語り合うという流れを作った。最初は無料モニターで千葉の大学生向けに行った。すごく反響がありました」。

足立(完治)さん「徳島のオンラインツアーに参加したら、徳島に行ってみたくなったんですよ。この力はなんだろうと思った。俺にも『臼杵に行ってみよう』と思わせられるのかなと。

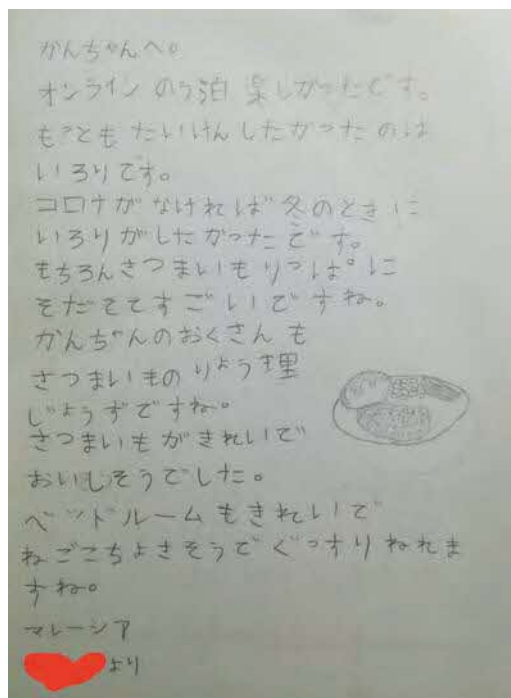
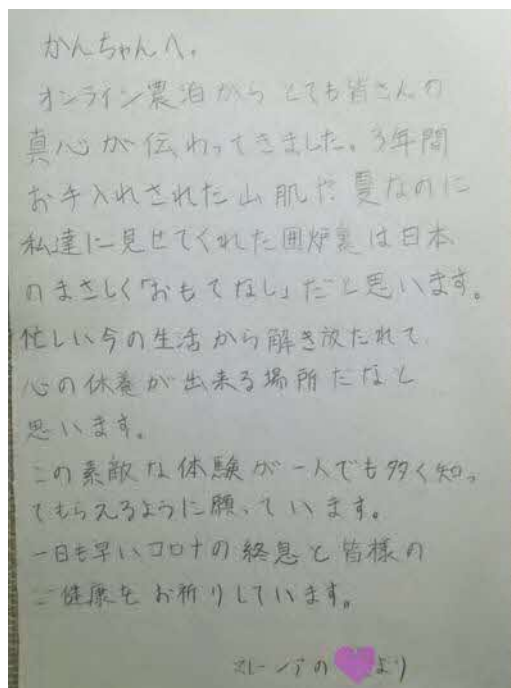
これまで10数回やりましたが、自然な気持ちで話せば伝わるのかなと思うようになりました。『足立さんの所に行ってみよう』という感想が聞けるので。

最初は拒否したんですが、一步踏み出したら新しい世界が広がるし、新しい人と知り合うことができますからね。この歳になっても、踏み出すことが大事な」。

藤沼さん「マレーシアの日本人とのハーフの子たち、高校生たちがオンライン農泊に参加してくれて、手紙を書いてくれるんですよ。完ちゃん(足立さん)のところに行きたいという感想ばかりで」。

足立(完治)さん「囲炉裏は珍しいみたいで、『囲炉裏を体験してみたいです』という感想が多い。私のこだわりの1つであるので、オンラインで紹介して、お湯を沸かすシーンも見せてますね」。

マレーシアからのお便り



藤沼さん「オンライン中継を始める30分前には火を入れる。カメラを持って案内して、ちょうど囲炉裏に来た時に焚き木がパチパチ、お湯がシュンシュン。『ほら音が聴こえる？炭が赤くなってるの見える？』と、リアルな感覚を伝えられるのがオンラインのいいところですね。

サツマイモの収穫を体験するオンライン収穫というのもやってみました。収穫風景を中継しながら交流し、その時に収穫したサツマイモは後日届けられる。反応はよかったけど、サツマイモの追加オーダーはまだですね。そのリピーターづくりがこれからの課題です。

ただ、いろんな種類のオンラインツアーに参加して来られる白杵ファンのような方もいらっしゃいます」。

足立(完治)さん「オンライン農泊は白杵の宣伝というだけではなくて、交流の場でもある。私が参加した時に、そこに行ってみたい、会ってみたいと思ったのも、単なるオンラインで繋がっているという感覚じゃなくて、一歩踏み出して行動を起こしたいという気持ちになった」。

藤沼さん「オンラインツアーじゃなくて『オンライン交流』です。双方向のクイズを出したり、お互いに自己紹介や写真を見せ合ったり。まさに交流の楽しさですね。

告知はピーティックス (Peatix: 国内外のイベントが集まるサイト。オンラインイベントの集客に強い) を使っています。いろんなサイトがあるんですが、今のやり方だとピーティックスくらいでじわじわくらいがちょうどいいかな。

オンラインと聞くだけで『イヤ!』という人は一定数います。まずお客として参加してみても面白そうだったら・・・とステップバイステップで進めるのがいいですね」。



「優しい時間」の囲炉裏



オンライン収穫のワンシーン



ピーティックスのサイト

6) これからの課題

神野さん「『連絡はITで』ということになって、スマホとかLINEとかの使い方を藤沼さんから教えてもらいましょうと、いま研修を始めているところです」。

藤沼さん「最終的には自分たちでZOOMを使えるように。みんなでオンラインの仕方も学んでいきましょうと」。

事務局としての課題は集客で、オンラインなどで探っているところです。農泊だけで誘致するというよりも、県単位でいろんな資源をつないでいくのが理想的なのかなと。観光客が大分県の中を見て回りたいと思った時に『白杵にはこういうものがありますよ』と提示できればと思います」。

足立(完治)さん「受け入れる農泊家庭である我々の課題は、モノマネではなく自分たちの個性をいかに出すか。『くらたび白杵に来たらこんなことができるよ、行ってみようや』となれるように」。

事務局としては内子・臼杵・高千穂を連携させるという構想があるので、自分たちもその構想に乗っかりながら、『四国も良かった、臼杵も良かった』と思えるものにしていきたい。それには個性が必要ですね」。

(6) 城下町臼杵に、くらたび臼杵の平林会長を訪ねる

臼杵での滞在時間ももうわずかとなりました。すでに日も傾きつつあります。できれば今回お忙しくてタイミングが合わずインタビューできなかった「くらたび臼杵」の会長、仏具店「山本鳳凰堂」の代表取締役・平林真一さんにもご挨拶をしておきたい。併せて、前日に時間がなくて見学できなかった臼杵の城下町も観てみたい。ということで、最後に臼杵市中心街に向かいました。

坂のある石畳の界隈に、いくつもの大きな寺院や武家屋敷が軒を連ねており、九州の雄藩であった大友家中の佇まいを感じることができます。

夕景の中、商店街にある山本鳳凰堂をお訪ねし、平林会長にご挨拶をしました。短い時間でしたが、平林会長の「臼杵の街を守りたい」という気持ちが、「くらたび臼杵」のコアとなっていると感じ、臼杵市を後にしました。



仏具店「山本鳳凰堂」



くらたび臼杵会長の平林真一さん



夕暮れの臼杵城下町